

「ドゥイツ(1)」(2019年08月19日)

インドネシア人は「金銭・お金」のことをウアン uang とわずにドゥイツ duit とすることがある。

ドゥイツというのは英語の do it を語源にしており、インドネシア語の中に取り込まれてお金の意味に使われるようになった。外国人がやってきて、札束をインドネシア人の眼前に見せつけて「やれ。do it!」と言うと、インドネシア人は理非曲直などお構いなしに、どんな汚れ仕事でも何でもした。こうして do it がお金の意味で定着し、インドネシア語になったのだ。

そういう与太話をするひとがあるが、騙されてはいけない。インドネシア人の金に目がない拝金主義的精神性を巧みに衝いて作られた話ではあるものの、想定されているようなシーンは現代インドネシアからちょっと時代をさかのぼれば、まず起こりえなかったような内容に見える。

インドネシアの歴史を見る限り、「外国語とは英語なり」で事足りている民族の文化とは異なり、インドネシア民族にとって外国語というのは十指で折りつくせないものであり、おまけに遠い過去から英語はマイナー外国語のひとつでしかなかったのである。つまりその話の創作者は duit というインドネシア語を英語に結び付けることで歴史的要因を軽視する失策を犯したとすることができよう。

外国から入ってきたひとつの言語表現がその国の国民にネイティブ表現のように使われるようになるために、どのくらいの歳月が必要とされるだろうか？十年二十年で済むはずはないだろう。言語の土着化は流行を乗り越えた場で進行するものはずだからだ。十年二十年はまだまだ流行というサイクルに乗っているものと見ておかしくあるまい。

だから上の与太話に対してわたしは、歴史が持つ時間の奥行きを把握できていない人間の創作話だろうという印象を最初から受けた。これはあくまでも、インドネシア人の拝金主義的精神性を揶揄し皮肉るジョークなのである。話の内容は真実ではない。

日本語では「金に目がない」という表現をするが、インドネシア語では類似表現として mata duitan という熟語が使われる。あらゆるものが金、金、金。金でないものに向ける関心などない、という精神傾向を物語る言葉がこの金銭睨み目付き mata duitan だ。

mata duitan はインドネシア社会で強い負の価値を持っており、下卑た蔑むべき人間性として忌避される。ドゥイツとウアンは同義語だが、mata uangan という置き換えはインドネシア語の中に存在しない。

ちなみにインドネシア語の mata duitan はジャワ語で mata dhuwiten と表記され、まったく同じ意味を表している。dhuwit はゴコ ngoko でインドネシア語の uang の意味に使われ、クロモ krama では dhuwit という語を使わずに uang や harta という語を使う。

それを見る限り、ジャワ人にとって dhuwit は高尚な響きを持たない単語であったことが推測され、同時に duit がジャワ語からインドネシア語に入ったものでもないことをわれわれは感じ取るのである。[続く]

「ドゥイツ(2)」(2019年08月20日)

では、duit が英語の do it!と関係がなく、またジャワ語由来でもないのなら、この言葉の語源はどうなっているのだろうか？ duit という言葉、いやもっと即物的に物事を把握するほうが良ければ、duit と称するコインはオランダ人がインドネシアにもたらしたものなのである。

16世紀末以来オランダ人がインドネシアにやってくるようになり、そのうちにVOC(オランダ東インド会社)という会社組織でインドネシアの物産を調達するようになったとき、かれらはオランダ本国で行われている通貨システムをそのままインドネシアに持ち込んできた。その中にかれら自身が名付けた duit コインがあった。

この duit あるいは duiten というコインは17～18世紀にオランダ本国でドイツ西部地域との交易に使われたものであり、そのためにドイツを意味するオランダ語の発音から採られたものだという解説がインドネシア語記事の中に見られるのだが、それを裏付ける別言語記事をわたしはまだ見出していない。

当時のオランダでは、1ドゥイツが2ペニツヒの価値を持ち、8ドゥイツが1スタイヴァー-stuiver に相当し、20スタイヴァーで1フルデンになった。つまり、1 gulden = 20 stuiver = 160 duiten という体系だったわけだ。

一方、インドネシアでオランダ植民地政庁が発足するまでのVOC時代、会社はオランダ本国の通貨体系を東インド・スリランカ・マラバールなどに持ち込み、当然ながらドゥイツ貨も大量に流入させた。VOCがドゥイツコインをもっとも大量に持ち込んだのはジャワ島だった。

本国で流通しているドゥイツコインとは見かけの異なるものにするため、会社はVOCというロゴの浮彫をコインの片面に施させて、それを海外で使った。交換比率も本国と別にして、1 stuiver = 4 duiten という比率にした。VOCと大きく浮彫されたコインをわれわれは今でも博物館で見ることができる。

言うまでもなくVOCは領土支配など考えておらず、VOCコインの鑄造は東インドの物産買付に他国が割り込んできて別の通貨で取引しようとする独占破りの闇取引を防止することがその最大の目的だったのである。こうして東インドでは 1 gulden = 20 stuiver = 80 duiten という通貨体系が用いられた。

ところがVOCが倒産し、オランダ政府が東インドの植民地経営に乗り出すという歴史の流れの中で、インフレが昂進した結果 1 gulden = 30 stuiver、1 stuiver = 120 duiten に交換比率が暴騰した。1833年

にスタイヴァー／ドゥイツで構成されていた従来のシステムはついに破綻し、1 gulden = 120 cent という通貨体系に変更されたのである。こうしてドゥイツコインは東インドの地上からその姿を消して行ったのだが、名前だけは後世に残った。さらにその後、1854年に 1 gulden は 100 cent に変えられている。

同じヨーロッパの中で、オランダの貨幣名称をイギリス人は英語で呼び、ドイツ人はドイツ語で呼んだ。いずこでも行われている外名呼称行為である。

ちなみに、イギリス人がどう発音しどう表記していたかを下記してみよう。

フルデン Gulden = ギルダール-Guilder

スタイヴァー-Stuiver/Stuyver = スタイヴァー-Stiver

ドゥイツ Duit/Duyt = ドゥイツ Doit

「ドゥイツ(3)」(2019年08月21日)

冒頭の与太話の出所はこのあたりに関わっていたのかもしれない。なにしろ、トーマス・スタンフォード・ラフルズがインドネシアを統治したイギリス時代、イギリス人もオランダ人がしていたように流通コインを鑄造したが、その時代にイギリス人が作ったドゥイツコインは片面にEIC、裏面には Doit Java と書かれていたのである。EICは East India Company の頭字語だ。

日本語のドイツという国名はオランダ語に由来している。本来は「ドイツ(人・語)の」を意味するオランダ語 Duits を日本人は Duitsland の意味で使うようになった。一方インドネシアでは、ドイツとの交易に使ったコインをオランダ人が「ドゥイツ」と呼んでいたために、それがインドネシア文化の中まで浸透してインドネシア人にとってのお金という言葉になってしまった、というのがこのドゥイツにまつわる故事来歴らしい。だからドゥイツの謎解きを英語からアプローチしようとする姿勢に無理があったということなのである。

長い歴史の中で、インドネシアにはさまざまな外国のコインが流れ込んで来て、そしてインドネシアの中で流通した。もっと後の時代になってオランダ植民地政庁が流通通貨の統制を行うようになったものの、東インド植民地通貨システムの中で植民地政庁が発行したもの以外のコインも一緒になって流通し続けた。

蘭領東インド植民地政庁は、オランダ本国の通貨システムとは異なるコインをインドネシアで発行し、流通させた。オランダ語では Nederlands-Indische gulden(蘭領東インドフルデン)と称する。1フルデンは100セン(オランダ語は cent、インドネシア語は sen)である。

このシステムで作られたコインの詳細は次の通りだ。だがひとつとは一般に、「XX センコイン」と呼ば

ずに、そのコイン自体に与えられた通称でそれを呼んだ。その習慣は米国人がニッケルやダイムという言葉で特定のコインを呼ぶのと共通している。

次のリストは蘭領東インドフルデンの[金種(呼称)発行開始年 — 終了年]を示している。

- 1 gulden (perak) 1821 - 1840
- 1/2 gulden (-) 1826 - 1834 つまり50セン
- 1/4 gulden (uang/talen) 1826 - 1945 つまり25セン
- 1/10 gulden (picis) 1854 - 1945 つまり10セン
- 1/20 gulden (ketip/kelip) 1854 - 1922 つまり5セン
- 2 1/2 cent (benggol/gobang) 1856 - 1945 つまり2.5セン
- 1 cent (sen) 1855 - 1945
- 1/2 cent (peser) 1856 - 1945 つまり0.5セン

[続く]

「ドゥイツ(終)」(2019年08月23日)

ウアンの同義語を調べてみると、duit, doku, kepeng, fulus などが顔を出す。その中では、もっとも多用されているのが duit だろう。これは「berapa duit?」という表現で日常生活に頻繁に登場する。

バハサプロケムで金銭・お金を意味する doku は duit が語源になっている。バハサプロケムの造語法のひとつである挿入辞-ok-を duit の最初の音節に置くことで、d-ok-u-it が出来上がる。プロケムも pr-ok-em-an という同様の作り方がなされたものだ。プロケムをブロックム(Blok M)と混同するのは、繁華街とやくざ者というイメージが導き出した結果なのだろうが、ブロックムをそこまでプレマンのメッカのように扱おうと機嫌を悪くするひとが出るかもしれないから、やめていただきたいものだ。

他のものについては、アラブの通貨システム dinar 金貨 dirham 銀貨の小単位である fulus が uang の意味で使われるケースがあり、kepeng の場合は中国の穴あき古銭を呼ぶ際に使われるイメージがわたしには強いのだが、uang を代替する語としても使われているということらしい。

それらはたいてい、名詞としての uang を代替するのとは別に、「いくら金銭なのか?」と表現するときの「金銭」に当たる部分にも使うことができるように思われる。「いくら値段か?」という場合の Berapa harganya?や「いくら金銭か?」というときの Berapa uangnya?あるいは Berapa Rupiah?という世界中のどこにもある表現に加えて、Berapa の次に別の同義語が置かれるということをそれは意味しているにちがいない。

しかしわたしが体験したことがらの中に、どうも例外的なものがあるようにも思えるのである。それは perak。上のリストにも見られるようにペラッもドゥイツやウアンと同じ出自になっている。

わたしがジャカルタで暮らし始めたころ、ブタウィ人社会では perak という助数詞が頻繁に使われていた。「Lu dikasi berapa perak?」「Ini harganya seribu perak.」というような使い方だ。もちろん実際はすべてルピアになるのだが。

その現象に接した若輩のわたしは、スペイン人がメキシコを領有して以来、豊富な銀山から採り出した良質の銀を用いて鑄造したメキシコ銀貨がアカプルコ～マニラ航路を経由して行われたスペイン人のアジア物産買付につき込まれた結果、東南アジア一帯の諸港でメキシコ銀貨が基軸通貨の位置付けを得ていたという話に結び付け、これはその影響なのかもしれないと考えたこともあったが、事の真偽はちよつと違っていたようだ。

ちなみにブタウィ語辞典では perak が uang の同義語となっていて、berapa uang? と berapa perak? の互換性はよくわかるのだが、Gue kagak punya uang. というような用法での perak への置き換えに接した記憶がわたしにはない。ひよつとすると、これはわたしの注意力の問題なのかもしれない。

perak をそのまま置き換えたときの Gue kagak punya perak. がもたらすであろう多義性が受け入れられるかどうかの問題に収束するようにわたしには思えるのである。もしそこに数字が入ることによって Gue kagak punya satu perak pun. となれば多義性は消滅するだろうからわたしの印象の説明はつくのだが、それがその時代の実態と合致していたのかどうかは、足で調査してみなければ分からないことかもしれない。[完]

「ルピア(1)」(2019年08月26日)

インドとインドネシアという国名はよく似ているために、その区別が困難なひとがいる。かれらには、地図上でその二国がどういう位置関係にあるのかということが真っ暗闇なのだろう。インドの通貨はルピーで、インドネシアの通貨はルピアだ。ルピーとルピアもよく似ているから、インドネシアの通貨をルピーと呼ぶ暗闇族が出現するのも無理はあるまい。

ところが実はなんと、ルピーとルピアは兄弟関係にあったのである。だからインドネシアに来たインド人がルピーとそれを呼んだところで、それほどたいした間違いにはならないのだろうが、同じことを日本人がすると見る目がうさん臭くなるように思えてしかたない。

古代インド人は紀元前6世紀に銀貨を作った。サンスクリット語で銀を意味する言葉はルピヤカム rupyakam であり、銀貨はルピヤルパ rupyarupa だった。ちなみに金貨はスヴェルネルパ suvarnarupa、銅貨はタムルルパ tamrarupa、鉛貨はシサルパ sisarupa となっている。

英語では rupee と書かれてルピーと発音されているインドの通貨だが、rupee に対応するデーヴァナーガリ表記の発音はルペヤ rupaya になっていて、むしろルピアの方に近い。ということは、インド人は本国にいてもインドネシアに来ても、同じようにルピア／ルペアと発音しているのかもしれない。

古い時代から、インドのルペヤ銀貨はインドネシアでのスパイス貿易のために流入してきていたように思われる。もっと後の時代にポルトガル人がインドに基地を設けてインドネシアのスパイス貿易に参入するようになってからは、ルペヤ銀貨の流入はもっと組織的なものになったはずだ。つまりインドネシア人にとっては、ルピアという言葉は古い時代からなじみ深いものだったことが十二分に推測されるのである。

インドネシア人にとって銀貨はルピアなのであり、それをムラコ語に置き換えればペラッ perak になる。インドネシアでは、ルピアとペラッという言葉が銀貨という物体を介在させて結びつくという図式ができあがっていたのだ。わたしがブタウィ社会で体験したルピアとペラッの同義語関係はそこに根差していたと言えるだろう。

東インド植民地通貨システムで作られた 1 gulden コインも銀貨であり、それは当然のようにペラッと呼ばれた。インドネシア共和国の通貨であるルピアというものがまだ影も形もない植民地時代の話の中にルピアという単語が出現することがあるのは、銀貨を指す呼称であるペラッがサンスクリット語源のルピアを誘導してくるからにちがいない。

インドネシア共和国が自国の公式通貨としてルピアを制定した時期にどのような状況がその地を覆っ

ていたかについて、見ておこうと思う。日本軍がオランダ植民地政庁を追い払い、大日本帝国政府発行の通貨が導入されたが、結局大日本帝国は瓦解し、共和国が独立を宣言した。[続く]

「ルピア(2)」(2019年08月27日)

日本軍が進攻する前の状態に戻そうとする連合軍がオランダ植民地支配の復活を図る蘭領東インド植民地文民政府(NICA)にインドネシアを引き渡し、NICAの強引な再植民地化とそれをさせまいとする共和国の間での戦争状態が、通貨というものに関してたいへんに複雑な状況を出現させたのがその歴史だ。

日本軍政はインドネシアへの進攻に先立って計画していた金種を現地に流通させた。1 Cent, 5 Cent, 10 Cent, 1/2 Gulden, 1 Gulden, 5 Gulden, 10 Gulden がそれで、すべてが紙幣であり、紙幣にはオランダ語で De Japansche Regeering(日本政府)と大書され、1/2 Gulden 以上の金種には De Japansche Regeering Betaalt Aan Toonder(日本政府は持ち主に支払う)という意味の保証文言が入っていた。それらは1942年にジャカルタ印刷工場で作られた。

その中の 1/2 Gulden は額面として HALF GULDEN と大書されていたが、オランダ人専門家は半フルデンという額面表記について、EEN HALVE というのが妥当な表現であり、日本人の作った翻訳版オランダ紙幣の面白さという趣をその現象に見ていたようだ。

新聞に発表された軍政監部の布告には、1942年3月11日から日本軍政統治エリアでは日本政府発行のフルデン紙幣と従来オランダ植民地政庁の発行してきたフルデンが通用することが表明されている。日本軍政はその統治期間中に一度もオランダ植民地政庁発行通貨の流通を禁止したことがない。最初は軍政監部が出していたそのフルデン紙幣は、1943年4月に南方開発銀行が業務を引き継いだ。

翌1943年、南方開発銀行はジャカルタ印刷工場で造幣し、新紙幣額面の通貨単位にはルピアが使われた。金種は 1/2 Roepiah, 1 Roepiah, 5 Roepiah, 10 Roepiah, 100 Roepiah の5種類で、今度はオランダ語を一切やめて Dai Nippon Teikoku Seihu という文字が De Japansche Regeering に取って代わった。

続く1944年9月、ジャカルタ印刷工場は三度目の紙幣発行を行った。前回と同じ金種と同じ表記は継続されたが、Dai Nippon Teikoku Seihu という文字がインドネシア語の Pemerintah Dai Nippon Teikoku に置き換えられた。このときは1千ルピア紙幣が用意されたが、流通される前に終戦を迎えたとのことだ。

また10、5、1センのアルミニウムコインも発行されたが、使われたのは特定一部地域に限られていた

そうだ。大量のコインを国中にばらまくエネルギーはもうなかったのかもしれない。

こうして終戦時には、日本軍政がインドネシア社会に流通させた三種類の紙幣が入り混じって使われていたのである。1945年半ばには、その三種類の紙幣がジャワ島に24億フルデン、スマトラ島に14億フルデン、またカリマンタン島とスラウェシ島にもっと少ない量が流通していた。その中には、日本軍がジャワ銀行内で見つけた蘭領東インド政府発行の未流通紙幣8千7百万フルデンも含まれていたと言われている。同じく2千万フルデン相当のコインも見つかったが、それは市場に流通させることなく、どこかに姿を消したそうだ。[続く]

「ルピア(3)」(2019年08月28日)

一方、インドネシアから追い払われた蘭領東インド植民地政庁はオーストラリアにいる間に復活時を想定して1943年に紙幣を作った。これは米国で印刷された。ウィルヘルミナ女王の姿を描いた紙幣はNederlandsch-Indie の名前で発行され、連合軍に担がれて戻って来たNICAが支配地域の中で使用した。

当然のことながら、それまで流通していた大日本帝国紙幣は連合軍とその関係者に受け取り禁止が命じられた。インドネシア人はNICA紙幣を uang NICA あるいは uang merah と呼んだ。ウアンNICAの多くは数字だけが大きく書かれていて、一見すると通貨が何であるのかははっきりしない。たとえば500という数字の書かれた紙幣には;

VIJFHONDERD

Nederlandsch-Indische Gouvernementsgulden

Lima Ratoes Roepiah

と記されていて、オランダ語では500フルデン、インドネシア語では500ルピアということになっている。

このウアンNICAの金種は次のようになっている。

500 Lima Ratoes Roepiah

100 Seratoes Roepiah

50 Lima Poeloeh Roepiah

25 Doea Poeloeh Lima Roepiah

10 Sepoeloeh Rorpiah

5 Lima Roepiah

2 1/2 Doea Roepiah Limapoeloeh Sen

1 Satoe Roepiah

50 Cent Lima Poeloeh Sen

ウアンメラと呼ばれたのは、50セント紙幣が赤で印刷されていたためなのだろうか？他の紙幣は青や

緑や黒などで印刷されており、50センと10ルピアだけが赤色のウアンになっていた。

インドネシア共和国は、敗戦国日本が大量に流通させた無保証の大日本帝国紙幣とウアンNICAが世の中に出回っている状況を正常化させなければならない立場に追いやられた。

共和国政府がまず公表したのは、どの金銭を政府はオーソライズするかという事柄だった。1945年10月3日に出された大統領布告で、インドネシア共和国領土ではジャワ銀行・蘭領東インド政府・大日本帝国の発行した通貨を有効と認めることを発表している。

[続く]

「ルピア(4)」(2019年08月29日)

ジャワ銀行は1828年に蘭領東インド植民地政庁が設立した通貨の発行と流通管理のための銀行で、日本軍政期中はオランダ・イギリス・中国などの銀行と共に解体を命じられたため、対外業務は停止した。戦後、戻って来たNICAが業務を再開させたが、1949年のインドネシア共和国完全独立によってインドネシア政府が接收し、中央銀行業務を行わせた。そして1953年7月1日からインドネシア銀行として名実ともに公式の国家機関になった。今ジャカルタコタ駅の向かいにあってインドネシア銀行博物館としてその壮麗な姿を顕示している建物が、そのジャワ銀行本店だったのである。

一方、蘭領東インド政府と大日本帝国はインドネシア共和国発足前の行政主体者であり、それらが発行した通貨は民衆の暮らしに深く入り込んでいるため、新政府が認めなければ国民生活に大混乱が起こる。しかしウアンNICAだけは意味合いが違っていた。共和国政府がそれを承認できなかったのは理の当然だったはずだ。

大日本帝国発行のルピア紙幣を民衆は東インドルピア Rupiah Hindia Belanda と呼び、独立宣言後にジャワ銀行が臨時に発行したルピア紙幣を民衆はジャワルピア Rupiah Jawa と呼んだ。

共和国政府がはじめて行った通貨発行は1946年10月30日のことで、額面はルピア表記になっているのだが、共和国政府発行のこの通貨をインドネシア人はインドネシア共和国通貨 (ORI= Oeang Republik Indonesia) と呼んだ。ORI発行に伴って、ORI以外の通貨はすべて流通が禁止された。

大日本帝国が出したルピア紙幣と区別する必要があったためだろう。共和国政府発行のルピア紙幣をそのままの名前で呼ぶことができず、ORIという名称で呼ばなければならない事情があったということだ。

ORI1ルピアは黄金0.5グラム相当と定められ、大日本帝国ルピアとの交換レートはジャワ島で1対5

0、スマトラ島で1対100とされた。

蘭領東インド植民地政庁が発行した Nederlands-Indische gulden (蘭領東インドフルデン) の体系をそのままルピア／センの体系に移し替えるのがORI発行の意図だったから、1ルピア＝1フルデンという価値比率が想定されたようだが、そうはうまく進展しなかったようだ。ルピアとフルデンのインフレに対する強さが同一になるはずもない。

オランダは元々、本国のフルデン体系と蘭領東インドフルデン体系を1対1の価値比率と定めていたから、第二次大戦後オランダ本国がフルデンの対米ドル交換レートを1.88/USDから2.65/USDに切り下げたので、ルピアの対米ドル交換レートは2.65ルピアで始まったとすることができそうだ。

もちろんそのころ、インドネシア共和国政府もルピア通貨も国際社会で認められていなかったのだから、そのようなマネーチェンジが行われることはまずなかつただろう。これはあくまでも机上の空論である。
[続く]

「ルピア(終)」(2019年08月30日)

ORIの第一次発行で全金種が出そろったのは1946年だった。全金種は次のとおり。

1 Sen, 5 Sen, 10 Sen, 1/2 Rupiah, 1 Rupiah, 5 Rupiah, 10 Rupiah, 100 Rupiah

第二次発行はインドネシア共和国政府がジャカルタを逃れてヨグヤカルタに首都を移した時期に当たり、1947年1月1日が発行日だった。金種は次ぎの通り。

5 Rupiah, 10 Rupiah, 25 Rupiah, 100 Rupiah

第三次発行は第二次を補完するためのもので、1947年から1950年まで散発的に行われた。金種は次の通り。

1/2 Rupiah, 2 1/2 Rupiah, 25 Rupiah, 50 Rupiah, 100 Rupiah, 250 Rupiah

1948年8月23日に行われた第四次発行の内容は次の通り。

40 Rupiah, 75 Rupiah, 100 Rupiah, 400 Rupiah, 600 Rupiah

1949年にヨグヤカルタで行われた最後のORIシリーズ発行は、発行枚数がたいへん少なかったことから、巷の隅々にまで行き渡らなかつた。見たこともない国民がたくさんいるそうで、希少価値のたいへん高いコレクターズアイテムになっている由。金種は次の通り。

10 Sen, 1/2 Rupiah, 1 Rupiah, 10 Rupiah, 100 Rupiah

この新しいルピアの体系でも、民衆は個々の金額の呼称を使う習慣を維持した。数字＋ルピアという

表現に単純化されるようになるのは、もう少し歳月が経過してからである。

Rp2.50 Ringgit

Rp1.25 Kupang

Rp1.00 Rupiah

50 Sen (-)

25 Sen Tali

10 Sen Picis

8.33 Sen Uang

5 Sen Ketip, Kelip, Stuiver

2.5 Sen Gobang, Benggol

1.5 Sen Pincang

1 Sen Sen

0.5 Sen Peser

0.25 Sen Cepeng, Hepeng

1949年8月23日から11月2日までオランダのハーグで開催された円卓会議で、オランダはついにインドネシアの領土に対するインドネシア共和国の完全主権を承認した。その日が来るまで、インドネシア共和国社会のために発行されてきたORIはその生涯を閉じて、それ以後はインドネシア共和国公式通貨としてやっと「ルピア通貨」という名前と呼ばれるようになったのである。[完]

「ルピアレートの変遷(1)」(2019年09月18日)

ルピアを国際舞台に載せて眺めてみるなら、ルピアという通貨を持った強さ弱さが見えてくる。対米ドルレートという指標で計ったルピアの価値はインドネシアの歴史の中で激しい変動を示した。

中でも、初代大統領スカルノと第二代大統領スハルトというふたつのエキセントリックな時代にルピアの価値は大きい変化を見せた。そのいずれの時代にも、各レジームの歴史、つまりは各大統領の没落史、とルピアの大暴落がまるで双子の現象であるかのようにオーバーラップしたことは、きわめて興味深いものがある。

どちらのレジームも、その終焉はたいへん純粋な政治的できごとによっていたのは間違いないにせよ、ルピアの大暴落という経済情勢がそのオーバチュアとして鳴り響いていたことにわれわれは意をとどめるべきだろう。

そのことを裏側から見るなら、かつてのインドネシア民族は経済面での順風逆風には鈍感で(いや、忍耐強いと言うべきか)、大きな社会変化は政治的事件の発生を必要とする体質を持っていたと結論付けることも可能であるにちがいない。古来からのジャワ王朝史のたどった道程にそれをなぞらえる歴史家も決して少なくない。インドネシア人は極めて政治的な民族なのであるといわれれば自身への自己評価がそこにも結び付いているようにわたしには思われる。

それぞれのレジームの歴史の中でルピアレートがどのように推移したのか、そこに焦点を当ててこのテーマを見てみることにしよう。

1. スカルノ時代

インドネシア共和国新政府が自国通貨を発行するに際して、ルピアを公式名称とし、蘭領東インドフルデンと等価にする構想が採られた。蘭領東インドフルデンはオランダ本国のフルデンと等価にされていたから、1946年10月に産み落とされたばかりのルピアはオランダフルデンの対米ドルレートと同じだったという論理の帰結になる。

産み落とされたばかりのルピアは日本軍政がまき散らした日本ルピアとの混同を避けるために、ルピアと呼ばずORI(Oeang Republik Indonesia = インドネシア共和国通貨)と呼ばれた。

オランダフルデンは第二次大戦中の対米ドル交換レートが1.88フルデン/USDだったから、上のロジックに従えば1.88ルピア/USDになるところだった。ところが1946年3月、オランダ政府はフルデンの対米ドル交換レートを2.6525フルデン/USDに切り下げたのである。だからORIが市場に出回ったときには、論理的に1米ドルが2.6525ルピアになっていた。

ただし、インドネシア共和国自体が国際的に承認されていない時期だから、その通貨が国際市場に受け入れられるはずがない。すなわち公式相場などは存在せず、かろうじてインドネシアルピアと米ドルを使える階層の中にできたブラックマーケットで通貨交換が成り立っていたにすぎない。1948年1月の非公式マーケットにおける交換レートは19.50ルピア/USDだった。

一部の人がはやし立てている日本が与えたインドネシアの独立というものを国際舞台に載せてみるなら、それは独立国家が持つべき要素の一部が欠如した不完全なものであったことが見えてくるはずだ。

不完全な独立国はグローバル社会で公認されたメカニズムに参加することができないのである。その原理はこの21世紀に起こったISIS/ダエシュの実例を見ても明らかなのではあるまいか。実に、70年ほど昔に起こったインドネシア独立というのは、ISIS/ダエシュと本質的に似通ったものを持っていたと言えるだろう。[続く]

「ルピアレートの変遷(2)」(2019年09月19日)

それを完全な独立国家にするために、インドネシア民族は旧態復帰をもくろんでインドネシアの地に戻ってきたオランダ植民地政府の軍事力による制圧を打破しようとして、手に手に銃を執り、また誰に指導されることもなく独自の外交を展開したのだ。

完全独立に至るまでのほぼ四年間にわたる長い闘争の時期にかれらが流した汗と血と涙の重みと、1945年8月17日に行われたインドネシア共和国独立宣言の発端となった、国際舞台をまったく無視して大日本帝国が行おうとした「独立」という名の権限移譲の意味合いを両天秤にかけるなら、インドネシア民族にとっての独立というものの重みがどちらにあるのかは言わずもがなのではあるまいか。

1949年8月23日から11月2日までオランダのハーグで開催された円卓会議で、オランダはついにインドネシアの領土に対するインドネシア共和国の完全主権を承認した。その真っ只中の1949年9月30日、公定レートは3.80ルピア/USDとなっている。

1952年2月、ルピアの切り下げが行われて11.40ルピア/USDとなった。

1959年8月25日、政府は国内に流通している1千ルピア紙幣と5百ルピア紙幣の価値を10%に落とし、また残高2万5千ルピア超の銀行口座を凍結した。そのとき交換レートは45ルピア/USDになったが、あっという間に9月には250ルピア/USDに暴落してしまった。

さらに1959年12月には550ルピア/USDにダウンし、それでも落下はとどまることを知らず、1960

年1月には1.960ルピア／USDの過去最低値に達した。

1962年12月には1,300ルピア／USDまで回復したものの、年々国内経済を揺り動かすインフレの波の中で、1963年1月にはまた1,900ルピア／USD、1964年には2,000ルピア／USDというレベルが続き、そして国家経済行政面で実質的な国民福祉を等閑視してしまった感のあるスカルノ政権時代に終止符が打たれることになった。1万ルピア紙幣が世の中に出現するようになるのは、スカルノ政権末期のこの時代のことである。

1961～62年にインフレ率は4百パーセントを記録した。国家経済は崩壊の崖っぷちに立たされ、政府の建設プロジェクトは予算不足のために停滞した。政府会計は膨れ上がる支出をカバーするだけの収入が得られず、赤字は増大の一途をたどった。

1960年の政府支出605億ルピアは1965年に2兆5,140億まで増大する一方、60年に536億だった政府収入は65年になっても9,234億にしか増えなかった。そしてその大きな齟齬を糊塗するかのよう、政府は造幣に精を出したのである。60年に478億ルピアだった市場流通通貨量はスカルノレジーム崩壊時に2兆7,750億に達していた。[続く]

「ルピアレートの変遷(3)」(2019年09月20日)

2. スハルト時代

1965年9～10月に起こったG30S事件によってスカルノ政府は崩壊し、政治の舵取りはスハルトの手に移る。

G30S事件の社会的大変動が一応は収拾されて世の中の平常活動が再開された1965年12月に、ルピアレートは35,000ルピア／USDになっていた。

1965年12月3日に出された1965年大統領決定書第27号によって、インフレによって価値の激減したルピア通貨を市場から回収し、新たなルピア通貨を市場に流通させる政策が展開された。スハルト新政権が行ったこの通貨政策は、実質的なデノミ政策だった。

スハルト新政権は新しい政治体制を新体制(オルデバル Orde Baru 略称オルバ Orba)と呼び、スカルノ体制を旧体制(オルデラマ Orde Lama 略称オルラ Orla)と呼んだ。

オルバ政府は新ルピア紙幣を発行してオルラ紙幣を世の中から回収することを決め、1965年12月13日20時からオルラ紙幣とオルバ紙幣の交換を開始した。そのときにウアンラマ uang lama と呼ばれた

旧紙幣は1千ルピアが新紙幣ウアンバル uang baru の1ルピアに相当するという交換レートが使われたのである。つまり新紙幣を発行して旧紙幣の貨幣価値を1千分の1にデノミしたということだ。

ただしオルバ政府は新紙幣を旧紙幣と同じレンジの額面金額で発行した。新紙幣も旧紙幣と同様に、1ルピア札から1万ルピア札までの額面のものになっていたのである。

それ以前にオルバ政府が何度か行ってきた紙幣の額面価値の縮小とは異なり、このデノミ政策はフェアでまともなものとして実践されるのが可能な政策だったにもかかわらず、オルバ政府の予期し尽せなかった国民の奇妙な反応によって、期待された成果はズタズタにされてしまった。

当時の国民にとっては、紙幣をハサミでちよん切るような、荒っぽい単純素朴なやり方のほうがわかりやすかったということにちがいない。

むしろソフィスティケートされたものと言えるスハルトデノミは、政策自体に欠陥があったわけではないというのに、国家経済を揺さぶるまでの悪影響をもたらしたおかげで、デノミというものに対する反感と悪評の記憶を国民の間に残すことになった。数年前からジョコウィ政府が準備を進めているデノミ政策に対する拒否の声の中に、スハルトデノミの悪印象が影を投げかけている面があるのは否めないだろう。

ウアンラマで10万ルピアの月給をもらっていた勤め人は、ウアンバルの100ルピアが与えられる。当時1リッター1千ルピアだった白米はウアンバルの1ルピアで買うことができる。

10万ルピアで借家契約し、前金に2万5千ルピアを支払い済みの者は、ウアンラマの7万5千ルピアで完済してもよく、ウアンバルの75ルピアを支払ってもよい。それがスハルトデノミのロジックだ。ところが世の中でいったい何が起こったか……。[続く]

「ルピアレートの変遷(4)」(2019年09月23日)

1965年12月14日朝、新旧紙幣の交換が開始されてから半日ほどしか経過していないというのに、西ジャカルタのプトジョ地区にあるガンハウベル市場を取材に訪れた新聞記者は、眼前で展開されている商売大繁盛の有様に驚かされてしまった。大勢の人間が市場で販売されているありとあらゆる商品を値切りもしないで買い漁っているのである。1千分の1に目減りするウアンラマを早急に使い果たして物品に替えようと購買者たちが必死になっている姿が記者の目に明白に映った。

案の定、市場の商人たちは値段を引き上げる。リッター当たり1千数百ルピアの白米はあれよあれよと言う間に2千、3千、4千、5千と値上がりしていく。キロ8千ルピアだった牛肉は1万2千ルピアに、生鶏1

羽は6千ルピアから1万数千ルピアに、ケチャップマニスは2千から4千に、砂糖はキロ1千4百ルピアから2千ルピアに、鶏卵1個3百ルピアが5百ルピアにといったありさまで、このパニックはどうやら全国的に起こっていた模様だ。

それは、市場価格行政の現場担当職員たちにとって、きりきり舞いさせられた悪夢のような一日だったにちがいない。だが扱い商品の価格を需要に応じて好き勝手に値上げした市場の商人を処罰したところで、既に火が着いたインフレパニックが収まろうはずもなかった。

経済評論家筋はこの現象を、政府の政策説明を正しく理解せず、過去にオルバ政府が行った通貨の額面縮小の繰り返しと誤解した国民の勘違いによるものだと分析したが、市場の投機筋がそれをチャンスと見て煽った事実も混在しており、こうして起こったインフレ発生という最大の問題がウアンバルの価値を低下させてしまったことに対する妙薬は政府の手中にもなかった。

ウアンバルの価値下落にたまりかねて、1966年1月には政府も公共料金の値上げを開始する。1月3日、政府は石油燃料市場小売価格を値上げした。ガソリン代の値上がりがありとあらゆる物価に影響を及ぼすのは、古今通例の慣わしである。直接的には運送輸送料金がそれに反応する。

1月5日、鉄道料金が引き上げられた。たとえばジャカルタ⇄スラバヤ間長距離夜行列車のエコノミー料金が14,200ルピアから113,600ルピア(いずれも旧紙幣で。新紙幣では113.6ルピアになる)に約8倍アップした。全国どの区間も十倍近い値上がり率だった。

都バス料金も例外でなく、従来から乗降区間に関係なく一回の乗車が旧紙幣でひとり2百ルピアだったものが、新紙幣でひとり1ルピアに変更された。学生たちはその値上がりに抗議して、バスに乗る際V字型に指を二本立てて「ドゥアラトゥス、ドゥアラトゥス」と叫ぶのが流行したそうだ。

ルピアの交換レートについてオルバ政府は固定相場制でスタートした。1965年から1970年まで、ルピアレートは250ルピア/USDで固定され、70年4月17日に378ルピア/USDに切り下げられたあと、続いて1971年8月23日に再度デバリが行われて415ルピア/USDとなる。[続く]

ルピアレートの変遷(終) (2019年09月24日)

1978年11月15日に有名な11月15日政策KNOP15が打ち出されて、従来からの固定相場制は管理変動相場制 controlled floating system へと移行し、レートは625ルピア/USDとなった。

この管理変動相場制というのは、外為市場の実勢レートでなく、政府中銀が外為市場に毎日のレート

の許容幅を指図するという手法であり、しかも外為市場に出現する現実の経済力に応じたレートからの乖離を防ぐために、年間に5%から10%といった幅でレートを目減りさせていくことも同時に行われた。

しかしそれでも乖離は避けようもなく起こる。そんなとき、政府は抜き打ち的にレートの切り下げを行い、そしてそのたびに経済は衝撃を受けて動揺した。

1983年3月29日のデバリでは、970ルピア/USDとなり、85年12月のレートは1,110ルピア/USDと大台に乗り、1988年10月には1,600ルピア/USDとなる。

その後もルピアレートは徐々に徐々に下降を続けて1995年1月には2,248ルピア/USDに達し、そして1997年の通貨危機へと転落して行ったのである。

近隣の東南アジア諸国が激しいレートの変動に喘いでいる中でインドネシアのこうむった影響は最初比較的小さいものだったから、インドネシアの経済力もなかなかのものだと思われていた矢先に、2,300ルピア/USDのレベルにあったレートがいきなり暴落を始めて5,500ルピア/USDに至り、大幅な変動が日々繰り広げられるようになった。

管理変動相場制は既の実効性を失い、政府中銀の管理と調整は後手後手に回ってもはやなす術を持たなかったようだ。1997年8月14日にオルバ政府はこれまで行われてきたレート管理のさじを投げ、外為市場で起こっている現象をそのまま受け入れる姿勢に変化した。完全変動相場制への移行である。

1998年1月末には14,800ルピア/USDを付けたが、2月は7,400ルピア/USDに回復し、4月には8,000ルピア/USDに微減したが、しかし乱高下は一向に収まらず98年6月には16,800ルピア/USDまで落ち込んだ。

そんな国内経済の大混乱は石油燃料の市場小売価格引き上げを誘導する。それに応じて学生を中心にした反対デモが各地で湧き起こる。その一方で、30年以上続いたオルバ政治体制への変革要求も種々の階層から噴出してきた。

1998年5月5日にメダン、5月8日にヨグヤカルタ、5月12日はジャカルタのグロゴル地区で学生デモと警察反モブ部隊との衝突が繰り返され、学生の中に死者が出る。

そして5月13日の誰が組織したのかわからない計画的組織的大暴動がジャカルタで発生して、都内のあちこちで火炎が噴き上げ、黒煙が天を覆った。

5月19日には学生デモが国会議事堂を占拠し、国会までもがスハルトへの退陣要求に与するように

なる。

そしてついに5月21日午前9時5分、スハルトの大統領辞任スピーチが行われて、オルバレジームは終焉を迎えたのである。[完]

编者追記

米ドルとルピアの為替レートの変遷をグラフにしてみると次のようになる。

興味あることは政変があるたびに為替レートが直線的増加から外れていることである。

1965年にレートが大幅に下がっているのは1/1000にデノミをおこなったからである。

